

研究論文

公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性

平松 隆円*

Relationship Between Makeup Behavior in Public Scenes, Social Right and Wrong, and Factors of Individual Difference.

Ryuen Hiramatsu*

Abstract

This research was conducted using a questionnaire survey involving 628 male and female university students with the following two objectives:

- 1) Identify the relationship between the perception of social rights and wrongs as a standard for “makeup behavior” in public, and to what degree people actually engage in “makeup behavior” in public.
- 2) Investigate the relationship of how differences in self-consciousness and other-consciousness plays a role in “makeup behavior” in public, and their perception of it in relation to social rights and wrongs.

Summarizing the results, “makeup behavior” in public and perception of social rights and wrongs were affected by the presence of strangers or non-strangers. Both the men and women who perceived that “makeup behavior” in relatively public places in the presence of strangers was socially acceptable were also prone to engage in makeup application, regardless of the presence of strangers or non-strangers. “Makeup behavior” in public and the perception of social rights and wrongs were influenced by public self-consciousness in men, and external another person-consciousness in women.

(キーワード 化粧行動：makeup behavior, 公衆場面：social scenes, 社会的是非：social right and wrong, 自己意識：self-consciousness, 他者意識：other-consciousness)

I. はじめに

電車内や駅のホームなど、公衆場面での化粧行動が話題になって久しい。

これまで、公衆場面で化粧を行う理由が、いくつか指摘されてきた。例えば、「化粧は時間がかかるため、公衆場面で過ごす時間を活用している」とする加藤¹⁾の指摘や、「化粧をして完成した顔ではなく、自己を表現するものとして化粧のプロセスを見せる」とする米澤²⁾の指摘などがある。また菅原³⁾は、同じ価値観を共有する仲間との人

間関係が濃厚になるほど、他の人間関係が希薄化し、公共場面に居合わせる人々の存在を気にせず、化粧をしていると指摘した。

しかしながら、公衆場面における化粧行動に関する実証的な調査や研究はほとんど見当たらないため、これらの指摘を裏付けることは難しい。

そのようななかで、平松⁴⁾が「公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の関連性」を検討している。それによると、公衆場面における化粧行動は、その場面の対人接触の高低による『社会的場面』『個人的場面』により構成されていることが明らかとなり、化粧の入念度の高い場面では、公衆場面における化粧行動も高いことが明らかと

*国際日本文化研究センター
京都大学 中核機関研究員

なった。これは、米澤の指摘を支持する結果であり、平松・牛田⁹⁾が明らかにした化粧への関心の高い者ほど化粧行動をよく行うという結果と関連する。

しかしながら、人々は、社会や集団において行動や判断の基準を共有している。つまり、公衆場面での化粧行動についても、ただ入念に行うからだけではなく、個人が所属する社会や集団に、行動の賛否について何らかの基準があると考えられる。

すなわち、子どもやある社会への新規参入者が、その社会固有の文化、価値、規範、行動様式を身に付けることを「社会化」とよぶが、公衆場面において化粧を行うことについても、若者の化粧行動が社会化された結果、表出しているといえる。そのため、行動の基準として、また社会化の影響として、若者が公衆場面で化粧を行うことを世間一般的にどのようにとらえられているかについて検討する必要がある。

そこで本研究では、次の点を明らかにすることを目的としたい。

1. 公衆場面での化粧行動に対する基準としての社会的是非をどのようにとらえ、実際に公衆場面で化粧行動をどの程度行っているか。
2. これまで化粧行動⁶⁾や化粧意識⁷⁾に関する研究などでも、その関連性が検討された自意識や他者意識といった個人差要因との関連性の有無。

Ⅱ. 研究の方法

1) 調査方法、調査時期、調査対象者

2008年5月、関西の4年制大学の学生を対象に、集合法質問紙調査を実施した。調査対象者は、男性329人($M=18.80$ 歳, $SD=1.16$)、女性299人($M=18.99$ 歳, $SD=1.58$)の合計628人($M=18.73$ 歳, $SD=1.21$)であった。

倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、調査への回答は任意であり、無記名で個人が特定されることがないことを事前に口頭で説明した。

2) 調査内容

(1) 公衆場面での化粧行動と社会的是非

平松⁴⁾や平松⁸⁾の先行研究を参考に、駅のホーム、授業中の教室、電車のなか、ファミレスなどの公衆場面を26項目選定した。

それぞれの場面で化粧行動(化粧直しを含む)を行ったことがあるについて、「まったくない(1)」から「よくある(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

また、それぞれの場面で化粧行動(化粧直しを含む)をすることを、世間一般的にどのように考えられているか(社会的是非)について、「化粧をしてはいけない(1)」から「常に化粧をしてもよい(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

なお、化粧がどのような行動を指すかについては、平松⁹⁾が詳細にまとめている。だが、本研究では化粧の定義を、厚生労働省¹⁰⁾が定めた薬事法における「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされているもので、人体に対する作用が緩和なもの」にしたがった。それに基づき、装飾(ファンデーション、ヘアスタイリングなど)、肌の手入れ(化粧水、乳液など)、香り(フレグランス、デオドラントなど)を化粧として扱い、その具体的内容を調査対象者に口頭で説明した。

(2) 自意識

自意識とは、自分自身への注意の向けやすさに関する性格特性である。自分の外見や他者に対する行動など外から見える自己の側面に対する注意を向ける程度の「公的自意識」、自分の内面や気分など外からみえない自分の側面に注意を向ける程度の「私的自意識」からなる。

本研究では、菅原¹¹⁾の自意識尺度の21項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析(主因子法・Varimax回転)

を行い、既存尺度と同じ2因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「自分を反省してみることが多い」「世間体など気にならない」「自分自身の内面のことには、あまり関心がない」をのぞく18項目で得点化した（公的自意識： $\alpha = 0.86$ 、私的自意識： $\alpha = 0.84$ ）。

(3) 他者意識

他者意識とは他者への注意、関心、意識が向けられた状態をいい、他者への注意の向けやすさに関する性格特性である。他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし理解しようとする意識や関心の程度である「内的他者意識」、他者の化粧、服装、体形、スタイルなどの外面に現れた特徴への注意や関心の程度である「外的他者意識」、他者について考え・空想をめぐらせその空想的イメージに注意を焦点付け、それを追いかける傾向の程度である「空想的他者意識」からなる。

本研究では、辻¹²⁾の他者意識尺度の15項目を用いて「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までで回答することを求め、1点から5点までの5件法で得点化を行った。

確認のため因子分析（主因子法・Varimax回転）を行い、既存尺度と同じ3因子を得た。内的整合性および因子構造の点から不適切な「人の言動には絶えず注意を払っている」「人のことをあれこれと考えていることが多い」をのぞく13項目で得点化した（内的他者意識： $\alpha = 0.86$ 、外的他者意識： $\alpha = 0.78$ 、空想的他者意識： $\alpha = 0.82$ ）。

(4) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

(5) 統計処理

PASW Statistics 17.0を用いて分析を行った。二人間の差の検定を行う場合、事前の手续として、Levene検定により等分散性を確認した。不等分散であった項目についてはAspin-Welchのt検定を、その他についてはStudentのt検定を行った。

Ⅲ．結果

1) 公衆場面での化粧行動と社会的是非の各項目の平均値

公衆場面での化粧行動の評定平均値をみると（TABLE 1）、男性はすべての項目で、女性は「同性の友人の家」「トイレ」をのぞいて、ほとんど行っていなかった。

公衆場面での化粧行動の男女差を検討するため、男性と女性の平均値の間でt検定を行った。

その結果、すべての項目で有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ公衆場面での化粧行動を行っていなかった。

社会的是非の評定平均値をみると（TABLE 2）、男性は「同性の友人の家」「トイレ」をのぞいて、女性は「同性の友人の家」「トイレ」「自動車のなか」「カラオケボックス」をのぞいて、あまり化粧をすることはよくないととらえていた。

社会的是非の男女差を検討するため、t検定を行った。

その結果、「居酒屋」「クラブ／サークルの部屋」「映画館」で有意な男女差が認められなかった。「同性の友人の家」「トイレ」「休みの時間の教室」「カラオケボックス」「自動車のなか」をのぞいて男性の方が女性に比べ、社会的に化粧をしてもよいととらえていた。

公衆場面における化粧行動と社会的是非の差を検討するため、t検定を行った。

男性は（TABLE 3）、すべての項目で有意な意識差が認められ、社会的是非が公衆場面における化粧行動を上回っていた。

女性は（TABLE 4）、「授業中の教室」で有意差が認められなかった。しかしながら、その他の組合せでは有意差が認められ、「電車のなか」で化粧行動が社会的是非を上回り、それ以外の項目で化粧行動が社会的是非を下回った。

TABLE1 公衆場面での化粧行動の男女差

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

	男 性		女 性		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
駅のホーム	1.35	0.94	2.10	1.39	-18.82	***
授業中の教室	1.30	0.86	1.79	1.23	-13.76	***
電車のなか	1.31	0.84	2.22	1.46	-23.03	***
エレベーターのなか	1.26	0.71	1.29	0.76	-1.42	*
同性の友人の家	1.52	1.16	3.15	1.61	-35.11	***
ファミレス	1.32	0.87	2.15	1.46	-20.73	***
学食	1.30	0.81	1.89	1.32	-16.26	***
コンビニ	1.25	0.72	1.30	0.79	-1.94	***
デパート	1.26	0.77	1.76	1.26	-14.54	***
近所のスーパー	1.21	0.64	1.29	0.76	-3.11	***
病院の待合所	1.23	0.69	1.38	0.90	-5.55	***
バスのなか	1.25	0.75	1.91	1.29	-18.87	***
公園	1.26	0.79	1.58	1.10	-10.00	***
異性の友人の家	1.35	0.95	1.93	1.37	-14.90	***
居酒屋	1.28	0.75	1.70	1.19	-12.47	***
クラブ／サークルの部室	1.35	0.87	2.03	1.40	-17.39	***
トイレ	1.91	1.43	3.76	1.43	-39.33	***
映画館	1.27	0.72	1.60	1.10	-10.92	***
ホテルのロビー	1.25	0.69	1.50	1.00	-8.79	***
休み時間の教室	1.37	0.92	2.29	1.47	-22.63	***
カラオケボックス	1.32	0.92	2.37	1.57	-24.72	***
自動車のなか	1.39	1.02	2.64	1.62	-27.84	***
屋外のオープンカフェ	1.24	0.71	1.57	1.08	-10.94	***
図書館	1.26	0.72	1.50	1.01	-8.42	***
劇場のなか	1.21	0.61	1.38	0.85	-6.90	***
バス停	1.21	0.66	1.49	1.01	-9.99	***

TABEL2 社会的是非の男女差

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

	男 性		女 性		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
駅のホーム	2.40	1.16	2.17	1.11	5.99	***
授業中の教室	1.94	1.11	1.80	1.10	3.94	***
電車のなか	2.03	1.09	1.93	1.09	2.77	**
エレベーターのなか	2.06	1.11	1.87	1.07	5.18	***
同性の友人の家	3.40	1.29	3.79	1.18	-9.58	***
ファミレス	2.55	1.22	2.44	1.22	2.65	**
学食	2.43	1.18	2.32	1.14	2.96	***
コンビニ	2.14	1.15	1.97	1.08	4.43	***
デパート	2.28	1.18	2.23	1.23	1.14	*
近所のスーパー	2.21	1.13	2.01	1.06	5.48	***
病院の待合所	2.10	1.12	1.79	0.98	8.93	***
バスのなか	2.07	1.12	1.97	1.11	2.75	**
公園	2.76	1.31	2.60	1.25	3.74	***
異性の友人の家	2.99	1.27	2.87	1.22	2.72	**
居酒屋	2.42	1.18	2.40	1.21	0.52	
クラブ／サークルの部室	2.93	1.29	2.97	1.28	-0.97	
トイレ	3.65	1.33	4.20	1.14	-13.51	***
映画館	2.30	1.19	2.28	1.18	0.54	
ホテルのロビー	2.30	1.18	2.17	1.10	3.41	***
休み時間の教室	2.64	1.28	2.87	1.29	-5.33	***
カラオケボックス	2.74	1.30	3.07	1.38	-7.53	***
自動車のなか	3.05	1.34	3.33	1.31	-6.41	***
屋外のオープンカフェ	2.45	1.21	2.23	1.16	5.46	***
図書館	2.13	1.15	1.91	1.03	6.13	***
劇場のなか	2.14	1.12	1.90	1.02	6.80	***
バス停	2.29	1.15	2.04	1.09	6.97	***

TABLE3 男性の公衆場面での化粧行動と社会的是非の差

*** $p < .001$

	公衆場面での化粧行動		社会的是非		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
駅のホーム	1.35	0.94	2.40	1.16	-34.96	***
授業中の教室	1.30	0.85	1.94	1.11	-23.09	***
電車のなか	1.31	0.84	2.03	1.09	-26.91	***
エレベーターのなか	1.26	0.72	2.05	1.11	-31.11	***
同性の友人の家	1.52	1.16	3.40	1.29	-49.71	***
ファミレス	1.32	0.87	2.55	1.22	-40.26	***
学食	1.30	0.81	2.43	1.18	-39.19	***
コンビニ	1.25	0.72	2.13	1.15	-33.39	***
デパート	1.26	0.77	2.28	1.18	-36.90	***
近所のスーパー	1.22	0.64	2.21	1.13	-37.29	***
病院の待合所	1.23	0.69	2.10	1.12	-32.27	***
バスのなか	1.24	0.75	2.07	1.12	-29.51	***
公園	1.26	0.79	2.76	1.31	-44.30	***
異性の友人の家	1.35	0.95	2.98	1.27	-48.62	***
居酒屋	1.29	0.76	2.42	1.18	-39.40	***
クラブ／サークルの部屋	1.35	0.87	2.93	1.29	-46.99	***
トイレ	1.91	1.43	3.65	1.33	-41.48	***
映画館	1.27	0.72	2.29	1.20	-35.99	***
ホテルのロビー	1.25	0.69	2.30	1.18	-38.40	***
休み時間の教室	1.37	0.92	2.64	1.28	-37.56	***
カラオケボックス	1.32	0.92	2.74	1.30	-41.29	***
自動車のなか	1.39	1.01	3.05	1.34	-45.10	***
屋外のオープンカフェ	1.24	0.70	2.44	1.21	-40.65	***
図書館	1.26	0.72	2.13	1.14	-30.85	***
劇場のなか	1.21	0.61	2.14	1.12	-34.67	***
バス停	1.21	0.66	2.29	1.15	-38.59	***

TABLE4 女性の公衆場面での化粧行動と社会的是非の差

*** $p < .001$, ** $p < .01$

	公衆場面での化粧行動		社会的是非		t値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
駅のホーム	2.10	1.38	2.18	1.11	-2.28	**
授業中の教室	1.79	1.23	1.80	1.10	-0.41	
電車のなか	2.22	1.46	1.93	1.09	7.80	***
エレベーターのなか	1.29	0.76	1.87	1.07	-23.14	***
同性の友人の家	3.15	1.61	3.79	1.18	-15.85	***
ファミレス	2.15	1.46	2.44	1.22	-8.06	***
学食	1.89	1.32	2.32	1.14	-13.25	***
コンビニ	1.29	0.78	1.97	1.08	-28.06	***
デパート	1.76	1.26	2.23	1.23	-17.07	***
近所のスーパー	1.28	0.76	2.01	1.06	-29.15	***
病院の待合所	1.37	0.90	1.79	0.98	-15.98	***
バスのなか	1.91	1.29	1.97	1.11	-2.01	**
公園	1.58	1.11	2.60	1.25	-27.98	***
異性の友人の家	1.93	1.37	2.88	1.22	-24.95	***
居酒屋	1.70	1.20	2.40	1.21	-21.61	***
クラブ／サークルの部屋	2.02	1.40	2.97	1.28	-24.96	***
トイレ	3.76	1.43	4.20	1.14	-11.07	***
映画館	1.60	1.10	2.28	1.18	-22.98	***
ホテルのロビー	1.50	1.00	2.17	1.10	-23.72	***
休み時間の教室	2.29	1.48	2.87	1.29	-14.71	***
カラオケボックス	2.38	1.57	3.07	1.38	-16.91	***
自動車のなか	2.64	1.62	3.33	1.31	-16.45	***
屋外のオープンカフェ	1.57	1.08	2.23	1.16	-21.52	***
図書館	1.50	1.01	1.91	1.03	-14.60	***
劇場のなか	1.37	0.85	1.90	1.02	-20.02	***
バス停	1.49	1.01	2.04	1.09	-19.14	***

2) 公衆場面での化粧行動と社会的是非の構造

公衆場面での化粧行動と社会的是非のそれぞれの構造を明らかにするため、評定平均値をもとに、それぞれ主成分分析分析 (Varimax 回転) を行い、構造化を試みた。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttman による最低固有値 1.0 を基準にした。

公衆場面での化粧行動では (TABLE 5)、2 因子が明らかとなった。第1因子は、「近所のスーパー」「病院の待合所」などの項目が高く寄与し

TABLE5 公衆場面での化粧行動の主成分分析 (Varimax)

	不特定他者場面 $\alpha = .953$	特定他者場面 $\alpha = .946$
病院の待合所	0.86	0.25
近所のスーパー	0.85	0.19
劇場のなか	0.85	0.30
コンビニ	0.82	0.17
エレベーターのなか	0.79	0.17
図書館	0.76	0.33
ホテルのロビー	0.76	0.35
屋外のオープンカフェ	0.75	0.44
バス停	0.73	0.37
映画館	0.70	0.43
公園	0.68	0.42
居酒屋	0.62	0.56
デパート	0.56	0.46
同性の友人の家	0.14	0.83
トイレ	0.02	0.80
休み時間の教室	0.38	0.78
ファミレス	0.43	0.78
カラオケボックス	0.31	0.77
自動車のなか	0.26	0.77
電車のなか	0.35	0.75
駅のホーム	0.42	0.69
学食	0.53	0.68
バスのなか	0.53	0.64
クラブ／サークルの部室	0.41	0.62
授業中の教室	0.54	0.58
異性の友人の家	0.50	0.55
固有値	9.44	8.33
累積寄与率	36.31	68.33

たため、『不特定他者場面 (化粧行動)』と命名した。第2因子は、「同性の友人の家」「トイレ」などの項目が高く寄与したため、『特定他者場面 (化粧行動)』と命名した。

この2因子で簡便因子得点 (各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法) を算出し (『不特定他者場面 (化粧行動)』: $\alpha = .96$ 、『特定他者場面 (化粧行動)』: $\alpha = .95$)、以後の

TABLE6 社会的是非の主成分分析 (Varimax)

	不特定他者場面 $\alpha = .968$	特定他者場面 $\alpha = .886$
劇場のなか	0.87	0.14
病院の待合所	0.85	0.12
電車のなか	0.85	0.11
コンビニ	0.85	0.18
図書館	0.85	0.15
バスのなか	0.85	0.14
近所のスーパー	0.85	0.22
バス停	0.84	0.24
エレベーターのなか	0.83	0.08
映画館	0.79	0.29
ホテルのロビー	0.79	0.32
デパート	0.77	0.26
授業中の教室	0.76	0.03
屋外のオープンカフェ	0.76	0.39
学食	0.73	0.42
駅のホーム	0.71	0.33
居酒屋	0.70	0.45
ファミレス	0.66	0.48
自動車のなか	0.21	0.78
同性の友人の家	-0.03	0.77
クラブ／サークルの部室	0.28	0.74
カラオケボックス	0.36	0.73
トイレ	-0.18	0.70
異性の友人の家	0.27	0.67
公園	0.48	0.65
休み時間の教室	0.47	0.62
固有値	12.24	5.38
累積寄与率	47.08	67.75

分析データとした。

社会的是非では (TABLE 6)、2 因子が明らかとなった。第1因子は、「劇場のなか」「病院の待合所」などの項目が高く寄与したため、『不特定他者場面 (社会的是非)』と命名した。第2因子は、「自動車のなか」「同性の友人の家」などの項目が高く寄与したため、『特定他者場面 (社会的是非)』と命名した。

この2因子で簡便因子得点 (各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法) を算出し (『不特定他者場面 (社会的是非)』: $\alpha = .97$ 、『特定他者場面 (社会的是非)』: $\alpha = .89$)、以後の分析データとした。

次に、明らかとなった各因子の男女差を明らかにするため、t検定を行った (TABLE 7)。

公衆場面での化粧行動では、『不特定他者場面 (化粧行動)』『特定他者場面 (化粧行動)』とも、有意な男女差が認められ、男性の方が女性よりも

公衆場面での化粧行動を行っていなかった。

社会的是非では、『特定他者場面 (社会的是非)』で有意な男女差が認められ、男性の方が女性よりも公衆場面での化粧行動を行うべきではないと考えていた。

3) 公衆場面での化粧行動を規定する社会的是非

公衆場面での化粧行動を規定する社会的是非を明らかにするため、男女別に公衆場面での化粧行動を目的変数とし、社会的是非を説明変数とする重回帰分析 (stepwise法) を行った。

男性では (TABLE 8)、公衆場面での化粧行動の『不特定他者場面 (化粧行動)』と『特定他者場面 (化粧行動)』のそれぞれを規定する社会的是非は、『特定他者場面 (社会的是非)』であった。

女性では (TABLE 9)、『特定他者場面 (化粧行動)』と『不特定他者場面 (化粧行動)』のそれぞれを規定するのは、『特定他者場面 (社会的是非)』であった。

TABLE7 公衆場面での化粧行動と社会的是非の各因子の男女差

*** $p < .001$, * $p < .05$

	男 性		女 性		t 値	有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不特定他者場面 (化粧行動)	1.19	0.58	1.47	0.76	-4.85	***
特定他者場面 (化粧行動)	1.30	0.66	2.32	1.07	-13.70	***
不特定他者場面 (社会的是非)	2.20	0.95	2.06	0.87	1.83	
特定他者場面 (社会的是非)	3.05	0.98	3.23	0.85	-2.28	*

TABLE8 男性：公衆場面での化粧行動を規定する社会的是非

*** $p < .001$

	不特定他者場面 (化粧行動)		特定他者場面 (化粧行動)	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
不特定他者場面 (社会的是非)	0.30	***	0.27	***
特定他者場面 (社会的是非)				
決定係数 R^2	0.09	***	0.07	***

TABLE9 女性：公衆場面での化粧行動を規定する社会的是非

*** $p < .001$

	不特定他者場面 (化粧行動)		特定他者場面 (化粧行動)	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
不特定他者場面 (社会的是非)	0.46	***	0.41	***
特定他者場面 (社会的是非)				
決定係数 R^2	0.22	***	0.17	***

4) 公衆場面での化粧行動と社会的是非を規定する個人差要因

公衆場面での化粧行動と社会的是非を規定する個人差要因を明らかにするため、男女別に公衆場面での化粧行動と社会的是非の各因子のそれぞれを目的変数とし、自意識や他者意識の各因子を説明変数とする重回帰分析 (stepwise 法) を行った。

男性では (TABLE 10)、公衆場面での化粧行動の『不特定他者場面 (化粧行動)』は公的自意識に負に規定された。また、社会的是非の『特定他者場面 (社会的是非)』は公的自意識に正に規定された。

女性では (TABLE 11)、公衆場面での化粧行動の『不特定他者場面 (化粧行動)』『特定他者場面 (化粧行動)』や社会的是非の『不特定他者場面 (社会的是非)』は、外的他者意識に正に規定された。

Ⅳ. 考察

1) 公衆場面での化粧行動と社会的是非

公衆場面での化粧行動について、ほとんどの項目で男性は「まったくない」「ほとんどない」と回答し、女性は「どちらともいえない」「ややある」と回答しており、公衆場面での化粧行動に男女差のあることが明らかとなった。

しかしながら、相対的に女性は「トイレ」や「同性の友人の家」で化粧行動を行っており、同性のみの状況では化粧を行っていることがわかった。

社会的是非について、ほとんどの項目で男性は、「あまりすることはよくない」「どちらともいえない」と回答し、女性は状況によって「あまりすることはよくない」から「してもよい」と回答していた。

程度に差はあるものの、男女とも「トイレ」「同性の友人の家」「自動車のなか」で化粧をしてもよいと考えていた。また、男性は「授業中の教室」「電車のなか」「バスのなか」で、女性は「病院の

TABLE10 男性：公衆場面での化粧行動と社会的是非を規定する個人差要因

* $p < .05$

	化粧行動				社会的是非			
	不特定他者場面		特定他者場面		不特定他者場面		特定他者場面	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
公的自意識	-0.16	*					0.14	*
私的自意識								
内的他者意識								
外的他者意識								
空想的他者意識								
決定係数 R^2	0.02	*					0.02	*

TABLE11 女性：公衆場面での化粧行動と社会的是非を規定する個人差要因

*** $p < .001$, * $p < .05$

	化粧行動				社会的是非			
	不特定他者場面		特定他者場面		不特定他者場面		特定他者場面	
	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率	標準化係数	有意確率
公的自意識								
私的自意識								
内的他者意識								
外的他者意識	0.27	***	0.39	***	0.16	*		
空想的他者意識								
決定係数 R^2	0.71	***	0.16	***	0.03	*		

待合所」「授業中の教室」「エレベーターのなか」で化粧をしてはいけないと考えていた。

男女とも「トイレ」や「同性の友人の家」で化粧をしてもよいととらえており、同性のみの状況では社会的に化粧をしてもよいと考えていることがわかった。

主成分分析により構造化を試みたところ、公衆場面での化粧行動や社会的是非に共通して、「近所のスーパー」「病院の待合所」といった不特定の他者がいる状況・相対的に公的な状況である『不特定他者場面』、「自動車のなか」「同性の友人の家」といった交友関係にある他者がいる状況・相対的に私的な状況である『特定他者場面』の2因子が明らかとなった。

これは、平松¹³⁾の化粧を施す生活場面が、不特定他者との接触や公的性が高い場面項目による『公的場面』、不特定他者との接触が低く私的性が高い場面項目による『私的場面』によって構造化された結果と対応する。

2) 公衆場面での化粧行動と社会的是非の関係

男女とも、社会的是非の『不特定他者場面（社会的是非）』の高さが、公衆場面での化粧行動の『不特定他者場面（化粧行動）』『特定他者場面（化粧行動）』を規定していることが明らかとなった。

すなわち、不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動を行っていることがわかった。

菅原¹⁴⁾は、電車内化粧といった行動は、公衆場面に居合わせる他の人々の存在を気にしていないという共通の背景から生まれている現象と指摘している。他者の存在に関係なく公衆場面で化粧をしてもよいと考えている者が、実際に特定・不特定に関係なく公衆場面で化粧行動を行っている本研究の知見は、菅原の指摘を裏付けるものとなった。

3) 公衆場面での化粧行動・社会的是非を規定する個人差要因

男性では、公的自意識の低さが公衆場面での化

粧行動の『不特定他者場面（化粧行動）』を規定し、公的自意識の高さが社会的是非の『特定他者場面（社会的是非）』を規定していた。すなわち、他者からみられる自己へ注意を向ける程度の低い者ほど、他者の存在に関係なく、不特定他者がいる比較的公的な場面で化粧行動を行っている。また、他者からみられる自己へ注意を向ける程度の高い者ほど、特定他者がいる比較的私的な場面で社会的に化粧をしてよいと考えていることがわかった。

これは、不特定他者がいる比較的公的な場面で化粧行動を行っている者は、他者の視線を気にしていないと推測され、菅原の指摘を裏付ける。また平松¹¹⁾は、男性の化粧を施す生活場面を規定する化粧意識が『必需品・身だしなみ』であることを明らかにしているが、他者からみられる自己へ意識を向ける程度の高い者ほど特定の他者の存在する比較的私的な場面で化粧行動をすることを社会的によいととらえており、化粧に対する『必需品・身だしなみ』の意識が関係していると推測される。

女性では、外的他者意識の高さが公衆場面での化粧行動の『不特定他者場面（化粧行動）』『特定他者場面（化粧行動）』や社会的是非の『不特定他者場面（社会的是非）』を規定していることが明らかとなった。すなわち、他者の外面に現れた特徴への注意や関心の程度が高い者ほど、特定・不特定に関係なく実際に公衆場面で化粧行動を行い、社会的に不特定他者がいる比較的公的な場面で化粧行動を行ってもよいととらえていることがわかった。

平松¹¹⁾は、女性の公衆場面における化粧行動を規定する個人差要因として外的他者意識を明らかにしているが、本研究も同様の結果であり、平松の結果を改めて裏付けるものとなった。他者がどのような外面特徴をもっているかという意識が、特定・不特定に関係なく実際の公衆場面で化粧行動や社会的に不特定他者がいる比較的公的な場面で化粧行動を行ってもよいととらえていることは、公衆場面における化粧行動を他者と同調させようとする意識が働いていると推測される。

V. まとめ

本研究では、若者自身の公衆場面における化粧行動と社会的是非の関連性を検討した。その結果を要約すると次の通りとなる。

1. 特定・不特定の他者の存在や状況の公私により2場面が、公衆場面での化粧行動や社会的是非に共通して構造化された。
2. 男女とも、不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動を行っている。
3. 男性では公的自意識が、女性では外的他者意識が、公衆場面における化粧行動や社会的是非を規定していた。

今後は、多様なサンプルを対象として、知見の一般性の吟味を行うと同時に、本知見をふまえ、社会的是非の形成要因として、親と子の公衆場面における化粧行動やその社会的是非に関する比較などを行いたい。

引用・参考文献

- 1) 朝日新聞 2001「車内化粧」は是非か、6月29日朝刊
- 2) 米澤泉 2001「化粧センス」を競う女性たち、化粧文化、41、20-25
- 3) 菅原健介 2005 羞恥心はどこへ消えた?、光文社、24
- 4) 平松隆円 2007 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の関連性、繊維製品消費科学、48 (11)、42-49
- 5) 平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究(第1報)―大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待の構造解明―、繊維製品消費科学、44 (11)、58-68
- 6) 平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究(第2報)―大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待と個人差要因―、繊維製品消費科学、44 (11)、69-75
- 7) 平松隆円・牛田聡子 2004 化粧に関する研究(第4報)―大学生の化粧意識を規定する個人差要因―、繊維製品消費科学、45 (11)、63-70
- 8) 平松隆円 2006 化粧行動許容に関わる公衆場面の構造解明とそれを規定する個人差要因、繊維製品消費科学、47 (11)、12-21
- 9) 平松隆円 2009『化粧にみる日本文化―だれのためによそおうのか』水曜社
- 10) 厚生労働省 2006『薬事法』改正平成18年6月21日法律84号
- 11) 菅原健介 1984 自意識尺度日本語版作成の試み、心理学研究、55、184-188
- 12) 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識、北大路書房
- 13) 平松隆円・牛田好美 2007 化粧規範に関する研究―化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因―、繊維製品消費科学、48 (12)、59-68
- 14) 菅原健介 2000 視線平気症と若者の羞恥心、恥の文化は失われたのか、化粧文化、40、ポーラ文化研究所、39-41